

暴かれた真実。業界黙示録

「暴かれた真実・業界黙示録」は、実際に起こったパチンコ・スロット業界の事件・詐欺・摘発などをもとに構成された実録風ドキュメント連載である。登場人物や店名は仮名化されているが、事件の内容は極力事実に基づき構成されている。閉ざされたホールの奥で何が起こっていたのか――いま、その真実が暴かれる。

File.16 実録・物置の金塊——パチンコ一族、二十八億円脱税の全貌

■フィーバーが生んだ野望

1981年。日本のパチンコ業界は、一つの「革命」の渦中にあった。

「フィーバー機」と呼ばれる電動式パチンコ台の登場が、それまでの遊技の概念を根底から覆した。大当たり時に派手な演出とともに玉が一気に放出されるその仕組みは、客を熱狂させ、ホールの売上を劇的に押し上げた。全国のパチンコ店に長蛇の列ができ、業界全体が空前の好景気に沸いた時代だった。開店前から島が埋まり、閉店時間まで席が空かない。そんな光景が日常になった。

京都を拠点に複数のパチンコ店を経営していた藤原宗一（仮名・当時69歳）もまた、その波に乗った一人だった。連日満員の店内、閉店後に積み上がる売上金の束。経営者として長年ホールの現場を見てきた藤原にとって、これは

どの「稼ぎ時」はかつてなかった。そしてその豊かさの中で、ある考えが彼の脳裏に浮かんだ。

「事業がうまくいっている時に、金のためておこう」

この一言が、25年にわたる犯罪の出发点となった。

藤原は売上の一部を帳簿から除外し、申告しない形で手元に残し始めた。最初は慎重に、ごく少額ずつ。しかし年を重ねるにつれ、発覚への恐れは薄れていった。税務署は来ない。誰も気づかない。この「静けさ」が、藤原の確信を育てた。「まじめに納税していたら金が残らない」。いつの頃からか、この言葉が彼の経営哲学として固定化されていく。

税務署も、取引先も、客も、誰一人として気づかなかった。日々の売上から静かに抜き取られた金は、帳簿の上では最初から存在しなかった。藤原グ

ループの「見えない金庫」は、年を重ねるごとに着実に膨らんでいった。

■一族経営という完璧な装置

藤原宗一が構築したのは、単なる脱税の手口ではなかった。それは「家族」という最も強固な組織を利用した、精巧な犯罪システムだった。

藤原には三人の息子がいた。長男と次男はそれぞれ医師と研修医として、エリートの道を歩んでいた。三男もまた、将来を嘱望された人物だった。しかし藤原は彼らを順次パチンコ業へと引き込んでいく。「医者をやっているにも金にならない。うちの仕事を手伝え」。家長の言葉に逆らう選択肢は、息子たちには実質的に与えられなかった。

完成した体制はこうだった。法人として大阪府某市でホールを経営する藤原と三男が法人部門を担い、長男・次

と消し去る虚偽申告だった。

個人経営の四店舗でも同様の手口が繰り返された。長男・次男・弟の三人が隠した所得は、三年間で計約63億4000万円。脱税した所得税は約23億3000万円に上った。グループ全体で隠した所得は約79億円、脱税額は約28億円。当時の脱税事件として全国で過去2番目の規模に相当する数字だった。

しかしこれすら、全体の一部に過ぎなかった。

抜き取られた現金はどこへ消えたのか。藤原が選んだのは、銀行でも不動産でもなく、より原始的な「蓄財」の方法だった。現金を金塊に換え、人目につかない場所に積み上げていく。価値が下がらず、名義も残らず、追跡されにくい。その保管場所として選ばれたのが、一族の自宅の物置だった。

■物置の金塊400キロ

2006年5月。大阪地検特捜部と大阪国税局の合同捜査班が動いた。長年にわたる内偵捜査の末に実行された強制捜索は、藤原グループの関係先およそ60か所に同時に及んだ。ホールの事務所、経理担当者の自宅、そして一族が住む邸宅の数々。帳簿、領収書、通

帳、金融機関の取引記録。あらゆる証拠が押さえられ、25年分の「秘密」が少しずつ白日のもとにさらされていった。そして、捜査員の一人が一族の自宅の物置を開けた瞬間があった。

目の前に広がった光景は、捜査の場数を踏んだ者たちをも絶句させるものだった。整然と積み上げられた金塊。鈍い黄金色の塊が、薄暗い物置の中で静かに存在していた。その重量は、後の鑑定で計約400キロと判明した。当時の金相場で換算すると、約10億円相当。脱税で得た現金を、ひたすら金塊に換えて物置に積み上げ続けた結果だった。帳簿を操作し、申告書を偽り、そして手元に残った金を最も「見えない形」で隠す。その徹底ぶりは、長年積み重ねられた犯罪者の論理の結晶だった。

同年9月12日、藤原宗一と三人の息子、弟の計5名が法人税法・所得税法違反の疑いで大阪地検特捜部に逮捕された。現職のパチンコ店経営者一族5人の同時逮捕は、業界に衝撃をもって受け止められた。

その後の大阪国税局の調査で、さらなる事実が明らかになった。立件された3年間に以前にも同様の手口が続いていたことが判明し、新たに20数億円の所得隠しが発覚。隠した所得の総額は100億円を超え、重加算税を含めた

最終的な追徴税額は約53億円に達した。脱税事件での50億円超の追徴課税は、当時としても極めて異例の規模だった。

フィーバー機が生んだ好景気の中で「金のためておこう」と思い立った瞬間から、25年。積み上がった金塊と、積み上がった脱税額が、一斉に崩れ落ちた瞬間だった。

■裁きと残響

2008年1月23日、大阪地裁。

並木正男裁判長は被告席の藤原一族を正面から見据え、判決に先立ってこう述べた。「近年まれにみる巨額の脱税で、会社の資金確保を図った動機は自己中心的だ。巧妙な証拠隠滅工作を図るなど、犯行は悪質」。静まり返った法廷に、その言葉は重く響いた。

主犯格の藤原宗一に懲役4年（求刑5年）の実刑判決。息子と弟には懲役1年から2年。法人と個人への罰金は総額6億9000万円。そして追徴課税53億円。数字の上では、相応の裁きが下されたように見える。

しかし法廷で明らかになった事実の中に、金額では測れない重さを持つものがあつた。医師と研修医だった息子たちが、なぜ犯罪の共犯者になったの

男・弟の三人がそれぞれ個人事業主として京都市内などの四店舗を別々に経営する。表向きは独立した複数の事業体だが、実態は藤原宗一を頂点とする一つの巨大グループだった。一族経営という形態が、外部からの監視を遮断する壁として機能していた。

手口は単純だった。各店舗の責任者は、日々の売上から一定額を除外するよう指示されていた。帳簿に記録されない売上は、申告書にも現れない。閉店後、売上金の一部は別の袋に移され、帳簿とは別の「現実の数字」として積み上がっていく。それが長年、毎日繰り返された。

法人部門の申告書に記された所得は「0円」。2003年から2005年の3年間、実際には約15億6300万円の所得があつたにもかかわらず、税務署への申告額はゼロだった。単なる過少申告ではない。存在した所得を、丸ご

か。公判で息子たちは口をそろえてこう述べた。「父の指示に従っただけだ」。白衣を脱いでパチンコホールに立ち、売上を帳簿から除外する指示を出し続けた年月。エリートとして歩んでいたはずの人生が、家長の論理によって別の軌道へと引き込まれていった構図は、単純な「悪意」だけでは語れない人間の組織と権力の暗部を映し出している。

なお、この事件は逮捕・裁判の過程において、一部のメディアが報道の姿勢を異にしたことにより、社会的な議論を呼んだことも記録に残っている。

パチンコ業は現金商売だ。毎日膨大な量の現金が動き、その流れを完全に把握することは容易ではない。藤原一族が25年にわたって脱税を続けられた背景には、この業種が本質的に抱える「見えにくさ」があつた。現在は売上管理システムの高度化により収益構造の透明性は大きく向上しているが、現金を扱う商売の構造的な特性は変わらない。

物置に積み上げられた金塊400キロは、「見えない場所に隠せば発覚しない」という確信が25年かけて積み上げた、歪んだ富の象徴だった。その確信が崩れ去った瞬間、物置の扉が開かれたあの朝に、この事件の全てが始まり、そして終わった。